
WORKING!! -個性的なファミレス-

神無月愛衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

WORKING!! 一個性的なファミレスー

【Nコード】

N7932Y

【作者名】

神無月愛衣

【あらすじ】

北海道某所にあるファミリーストラン『ワグナリア』。

ここには、『ミニコン』の男子高校生や、『男性恐怖症』の女子高校生、小さい頃から帯刀している二十歳の美人フリーターなど、個性的な店員ばかりが働いていて――！？

小説を書く前に

これは、私、神無月愛衣が好きなアニメ『WORKING!!』の小説です。

この小説の登場人物は、以下の通りです。

〈登場人物〉

- | | |
|--------|---------|
| ・小鳥遊宗太 | ・伊波まひる |
| ・種島ぽぷら | ・佐藤潤 |
| ・轟八千代 | ・山田葵 |
| ・相馬博臣 | ・白藤杏子 |
| ・松本麻耶 | ・音尾兵吾 |
| ・音尾春菜 | ・山田桐男 |
| ・小鳥遊一枝 | ・小鳥遊泉 |
| ・小鳥遊梢 | ・小鳥遊なずな |

毎回、キャラの視点を変えていこうと思っています。

基本は、自分でストーリーを考えますが、『こんな話を書いて欲しい!』というのがあれば、書こうと思

っています（その際は、メッセージをお願いします）。

更新を頑張りますので、是非読んでください♪

小説を書く前に（後書き）

これはあくまでも前書きみたいなものなので、見なくてもいいし、見てもいいです。

私的には、この小説を書いていることを知って貰えればいいので。

今から更新していきますが、アドバイスや、感想を是非書いて欲しいです。

これからよろしくお願いします。

一品目 小鳥遊宗太の悩み（前書き）

と言うことで『第一話』です。

どうぞお楽しみください♪

一品目 小鳥遊宗太の悩み

北海道某所にあるファミリーストラン『ワグナリア』。

おれ——小鳥遊宗太は、このファミレスで毎日アルバイトで働いている。

家では、鬱陶しい姉たちの面倒を見て、このファミレスでは、『男性恐怖症』のとある年増の相手をして、

毎日忙しいばかりである。

「ハア……」

考えるだけで憂鬱だ。

どこへ行っても、年増の相手をしなければならない。

何処かに『楽園』はないだろうか……。

ちっちゃくて、可愛いものばかりの『楽園』が……。

そんなことを考えながら歩いていると、おれはいつの間にか、『ワグナリア』に到着していた。

「まあ、ここに来れば、先輩もいるしな……」

そう思いながら、おれは従業員用のドアを開けた。

「あ、かたなしくん！ 今来たの？」

と、明るく声を掛けたのは——

「あ！ 先輩！ おはようございます！」

「おはよう、かたなしくん」

学校とファミレスの先輩の——種島ぽぷらである。

先輩は、ちっちゃくて。

先輩は、可愛くて。

先輩は、おれの『妹』になってほしいくらいのちっちゃくて可愛い先輩なのである。

「もう！ かたなしくん！ 『ちっちゃい』って所を強調しないで

よ！」

先輩は、いつものように怒っていた。

「あゝ！ 怒ってる先輩も可愛いな」

「逆効果!？」

どうやら先輩は、おれが先輩の『可愛さ』を強調したことがショックだったらしい。

身長が低いのは先輩の悩みだもんな……。

でも、そんな悩んでいる先輩も可愛いのだが。

「先輩はいつもちっちゃくてちっちゃくて可愛いもんな」

おれはいつものように、先輩の頭を撫でた。

すると先輩は、

「もゝ！ しょうがないな、かたなくんは」

と、お姉さんぶっていた。

正直、可愛い。

あゝ。世の中、先輩みたいなちっちゃくて可愛い人ばかりだったらしいのにな……。

「じゃあ、おれ着替えてきますね」

「はい」

そう言っておれは学校の制服から従業員用の制服に着替えるため、更衣室へと向かった。

「おー、小鳥遊。来てたのか」

着替えて働こうとしたおれに、大人の女性の声が掛かった。

「店長……」

おれは店長がパフェを食べているのを見て、溜息をついた。

「またチーフに作ってもらったんですか？」

「ああ。腹が減ってたからな」

「佐藤さんに怒られますよ？」

「構わん。食べればそれでいい」

そう言って、右手に握っているスプーンでパフェを一口取り、食べる。

「……怒られても知りませんからね……」
年増のことなんて、どうでもいい。

それより、仕事だ、仕事。

「――では、ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

そう言っておれは、テーブルを後にする。

今日は天気が悪いからか、客が少ない。

どうやら、今日の天気予報は当たったみたいだ。

「雨……降らなかったらいいね……」

「そうだね……。雲が多くなってきたから、今日は早めに食べようか……」

「そうだね。そうしょっか」

なんて、お客さんの声も聞こえる。

「雨……降るんだろうか……」

「そうだね……。私傘持ってきてないから、もし降ったらどうしよう……」

「え？ 先輩、天気予報見なかったんですか？」

「うん。忘れちゃったから……」

少し落ち込みながら、先輩は言った。

可愛い……。

「……かたなくん、私のこと、また可愛いって思ったでしょ？」
「え？」

いきなり先輩が話を切り出してきたので、おれは思わず驚いてしまった。

「ハア……。かたなくんには、私が何言ってもだめだね……」

「……………」

「何を言っただけ目なことは、背がちっちゃいのと、佐藤さんにい

じめられることの次くらいの悩みだよ」

「先輩……」

その悩みの順だと、おれのことは三番目ってことだよな。
けっこうな悩みではないか？　これは。

「ねえ、かたなしくん。かたなしくんには、悩みとかないの？」

「悩み……か……」

うーん……。よく考えてみれば、悩みなんていっぱいあるぞ。

例えば……。

………何か考えるだけでいらいらしてきた。

「……年増……！」

「え？　何？　かたなしくん」

「一枝姉さんや、泉姉さんや、梢姉さんとか……！　とにかく！
年増の相手をしないといけないのが悩みですね！」

「か……かたなしくん！　落ち着いて……！」

いつの間にかおれは本気になっていた。それを見ていられなくな
ったのか、先輩は必死で止めていた。

「だ……大丈夫？」

「ふう……。落ち着きました、先輩。もう大丈夫です」

「そっか……。よかった」

安心したのか、先輩はにっこりと微笑んでいた。

「かたなしくんも結構大変だね」

「そうですね。ただでさえ、姉さん達の面倒を見てるって言うの
に……」

「ん？」

「伊波さんの『世話係』もありますからね。前、店長がおれを労
って『世話係』を解任したとき、あのままにしていけばよかったん
ですかね」

と、このときおれは、特に悪気はなく、冗談のつもりだった。
それなのに。

冗談では済まなくなってしまった。

「か……かたなくん……」

「ん？ 何ですか、先輩」

よく見ると、先輩は、『今言っちゃいけなかった！』みたいな顔をしていた。

「どうしたんですか？ せんぱー」

その時だった。

ガッシャーン！

と、皿が割れた音がした。

「ん？ この音は……。また山田か。全く、山田も困るな」

と、そこで思い出す。

そう言えば、今日は山田シフト入ってなかったな。

じゃあ、一体誰が……。

その人物は目の前にいた。

肩を震わせて、泣いていたのは――

「い……伊波さん……？」

そうだった。

伊波さんも、今シフト中だった。

ってことは――今ここにいて皿を割ったってことは――今の、先輩との会話を、聞いていた？

「……………う……………」

伊波さんは、少しだけ泣いていた。

「ち……違うの！ 伊波ちゃん。これは……その……かたなくんの冗談で……」

先輩は、必死に、この誤解を解こうとしていた。

「そうですよ！ 伊波さん。おれは、最後まできちんと、い――」

「……………犬の面倒を見る……でしょ？」

伊波さんは、おれの言葉を遮るように言った。

いや。

実際、遮ったんだろう。

「わ……私、小鳥遊くんが……面倒を……最後まで見てくれるって
言ってくれてこと……嬉しかったのに……」

「伊波さん……」

「だ……だから、男嫌いを直すこと……。小鳥遊くんを、一秒でも
早く殴らずに済むようにって……。頑張ろうって……。そう思って
たのに……」

伊波さんの言葉は、途切れ途切れで上手く言えてなかったが。
普通に言うよりも、遙かに重かった。

「私は……結局、小鳥遊くんにとって……『犬』でしか……そんな
存在でしか……なかったんだよね？」

「……………」

「私のこと……犬としか、見てなかったんでしょ……！」
最後に、口を開いて、何かを言って、その場を離れていった。

「い……伊波ちゃん！ かなしくん！ 伊波ちゃんを追いかけな
きゃ！」

先輩は必死だ。

普通なら、伊波さんを追いかけられるだろう。

けど、今のおれにはそんな簡単なことができなかった。

伊波さんが最後に言った言葉。

声が小さくて聞き取れなかったが、口の動きだけで何を言ってい
るかおれには分かった。

——最低だよ——

その言葉が、おれに重くのし掛かっていた。

一品目 小鳥遊宗太の悩み（後書き）

どうでしたか？ 『第一話』——『一品目 小鳥遊宗太の悩み』はいきなりこんな話から入るのは、正直どうかなくって思いましたけど。

今放送中の第二期『WORKING!!』は、こんな感じの、人間関係が、ストーリーを引き立たせているので、それに乗っかろうと思いました。

……でも、難しいですね、宗太の語りって。

『可愛い』とか、『ちっちゃい』とか、連呼してますもん。

そんなことしてたら、一話で終わらせるつもりだったのが、一話と二話に分けることになってしまいました。

ま、いっかな？

ってことで、『一品目 小鳥遊宗太の悩み』でした。
是非続きを見てください。

二品目 伊波まひるの想い（前書き）

『二品目 伊波まひるの想い』です。

タイトルからも分かるように、今回の語りはまひるです。

個人的には、結構まひるも好きなので、頑張ります！

それでは、召し上がれ♪

二品目 伊波まひるの想い

「ハア……ハア……ハア………」
疲れた……。

ファミレス『ワグナリア』から結構走ってきたみたい……。でも、仕方がない。

小鳥遊くんにあんなことを言われたんだから。気が動転しちゃったんだもん……。

「それにしても……酷かったな、小鳥遊くん……」
多分、私に気付いていなかったんだと思う。

だから種島さんもあんな風に小鳥遊くんのフォローをしていたんだろう。

それでも、あれは酷かった。

——前、店長がおれを労って『世話係』を解任したとき、あのままにしていればよかったんですかね。

確かに小鳥遊くんはそう言った。

「もう……、小鳥遊くん……の！ 馬鹿……！」

小鳥遊くんが殴られずに済むように。

小鳥遊くんが痛い思いをしないで済むように。

小鳥遊くんが幸せになれるように。

全部——小鳥遊くんのためだったのに……。

貴方のために、男嫌いを直そうと思ってたのに……！
頑張ってたのに……！

それなのに……！

小鳥遊くんは、ちっとも気付いてくれない。

鈍感すぎるよ……。

ぽつん。

と雨が降り始めた。

「そう言えば……、天気予報……雨だったわけ……」
どうしよう。私今、傘持っていないや……。

「今日は最悪だな……」

そんな風に、感情に浸っている間にも、雨はどんどん強くなっていく。

やがて、小雨から大雨になった。

そんな雨に紛れながら私は、

「うっ………！ うっ………！ うう………」

涙を流した。

私が泣いていることなんて。

きつと雨が隠してくれる……よね……？

しばらくの間泣いていたけど、今私は泣きやんだ。

今はただただ、立ち竦んでいた。

雨に私は濡れ続ける。

「……………」

無言の時間が、絶えることなく流れていく。

このまま、永遠とこの時間が続くんじゃないのかって思った。
さっきまでは。

「――あらあら。ここにいたの？ 伊波ちゃん」

「え……？」

私の頭の上に、すっと傘を差す。

「探したんだから」

その人物は――

「や……八千代さん？」

ファミレス『ワグナリア』のホールチーフの、轟八千代だった。

「な……何でここにいて分かったんですか？」

「さあ……。チーフの感、かしら？」

「そうですか……」

今、チーフなのは、そんなに関係ないんじゃない？

「さあ、帰りましょ、『ワグナリア』に」

「え……」

「みんな、伊波ちゃんのこと、心配してるのよ？」

「……そう……かもしれないけど……」

「けど？」

私は、言葉を探すのが、大変に思えた。

だって、今の気持ちを、どう言葉にしたらいいのか、分からなかったから。

「か……小鳥遊くんは……私のこと……どうでもいいみたいだし……」

「……………」

「せ……『世話係』も……嫌……みたいだったから……その……」
「気まずい？ 小鳥遊くん」と

八千代さんの言葉は、真っ直ぐで、遠慮なんてなかったけど。
今、一番優しい言葉のような気がした。

「……はい」

私は、八千代さんの言葉に、素直に返事をした。

「そっか……」

八千代さんは、『やっぱりね』と言いたそうな顔だった。当たり前だ。

私が言えることは、それだけだから。

八千代さんもそれを分かって――

「でもね、伊波ちゃん」

と、驚くことに、八千代さんは言葉が続けた。

「貴女は小鳥遊くんに会うのが気まずいかもしれないけど……」

「……………」

「小鳥遊くんは、伊波ちゃんに、謝りたいと、そう思っているのよ？」

「え――」

それは、私にとって意外だった。

あの、十二歳以上の人を人間と認めず、『年増』と呼ぶ彼が。

一歳年上の私に？ 謝りたい？

「ほ……本当ですか……？ 八千代さん……」

「ええ」

八千代さんは、はっきりと断言した。

私にとってそれは、一番嬉しい返事だった。

「だから、帰りましょ？ 『ワグナリア』へ」

微笑んでそう言う八千代さんは。

輝いていた。

私はそんな八千代さんに、感謝の気持ちを抱きながら、

「……………はい」

確かに、そう言った。

「……………あ！ 伊波ちゃん！」

お店に入って途端、種島さんが、勢いよく私に向かって走ってきた。

「た……種島さん……」

「もう！ 伊波ちゃんの馬鹿！ 心配したんだよ！」

「うん……。ごめんね、種島さん」

私の所為で、種島さんに心配を掛けちゃったんだな……。
本当にごめんね、種島さん。

「い……伊波さん……」

と、不意に声が掛かった。

「た……小鳥遊くん……」

いつからいたんだろう。

私の目の前には。

小鳥遊くんがいた。

「あの……ですね、伊波さん……その……」

小鳥遊くんは、凄く戸惑っていた。

そっか。『悪かった』って、思ってくれてるんだ。

八千代さんの言った通りだったんだ。

私の心が、晴れた気がした。

「もういいよ、小鳥遊くん」

「え……」

「冗談だったんでしょ？ あれは……」

「……………」

「私も悪かったと思うよ。冷静じゃなかったし……」

「伊波さん……」

「だから……、許すよ」

「はい……」

小鳥遊くんは、安堵の表情を浮かべていた。

その後、彼はこう続けた。

「おれの方こそ……。すみません」

「……いいよ」

私は、小鳥遊くんが謝ってくれた、それだけで嬉しかった。
……それはともかく……。

「あ……あの……。それでね……。？ 小鳥遊くん……」

「え？ 何ですか？」

「なんて言うか……。その……」

さつきから私はある『衝動』を押さえていた。

それがもう、抑えが効かなくなってきた。

「そ……その……えっと……」

「え——」

「い……いやああああ！」

バキッ！

そんな音が響いた。

「い……伊波……さん？」

「ご……ごめんね！ 小鳥遊くん！」

小鳥遊くんは、床に倒れて、驚愕していた。

私は、予想以上に殴ってしまったので、自分でも驚愕していた。

「その……さつきからずっと我慢……してただけど……つい……」

見ていた種島さんも、驚いていた。

でも、今の私はそんなこと、お構いなしだった。

「ごねんね……でも……」

私は、彼を見据えて、しっかりと、はっきりと言った。

「これからも、よろしくお願いします」

私の心みたいにな、いつの間にか。

雨はやんで、空は澄み切っていた。

そんな私は。

今日も小鳥遊くんのことを想いながら。

男嫌いを克服しようと思う。

二品目 伊波まひるの想い（後書き）

とりあえず、『二品目 伊波まひるの想い』、完結です。

なんか、『WORKING!!』なのに、どうも書き方が私寄りに……。

ま、いつか。

今回の話で、やっとこれを書くのに慣れてきました。

次回も頑張りますので、読んでください。

神無月愛衣でした♪

三品目 山田のバイト生活（前書き）

今回の語りは山田です。

前は「恋愛」で、少しシリアス（？）だったので、山田の力で明るめにしよう！

みたいな感じです。

それでは、どうぞ♪

三品目 山田のバイト生活

みなさんこんにちわ。

ちっちゃくて可愛い、みんなの山田です。

みんなの山田がやっと語りです。

山田好きの皆さん、お待たせしました。

今回は、山田好きの人達に送る、山田の山田による山田のための小説です！

是非読んでくださいね！

それでは、スタートです！

ガッシャーン！

「ああ……。山田、またやってしまいました……」

あゝあ……。小鳥遊さん、怒るだろうな。

前、山田がお店と自分のために、皿を割ったことを隠ぺいしようとしたのに……。それをあっさりと小鳥遊さんは見破りましたからね……。

さすが小鳥遊さんです。

相馬さんの方が、よっぽどかいいですけど。

それより……。

「皿、どうしましょう……。山田、今月はもう数え切れないほど割ってしまいました……」

あの表、書くの面倒なんですよね。

高いし、位置が。

でも、種島さんが身長を伸ばすためなので、仕方がありませんね。ここは山田が大人にならなくては！

「なら最終手段です……」
隠ぺい。

これしかありません。

「よし！ 山田の『山田皿割り隠ぺい作戦』、決行です！」

「……………おい、山田……………」

な……………何でしょう……………。

山田の背後から、もの凄い殺気を感じます……………。

「何を隠ぺいするって……………？」

何回も怒られた山田は、もう誰か分かります。

声だけで。いや、殺気だけで。

「た……………小鳥遊さん……………」

「一体お前は何回皿を割ったら気が済むんだー！」

「き……………きゃあああ！ や……………山田は悪くありませんっ！」

怖いです！ 恐怖の小鳥遊さんです！

鬼のような小鳥遊さんに、山田は一時間弱説教されました。

人のことは言えませんが、小鳥遊さん、仕事をしましょ……………？

「うう……………。酷いです。外道です……………」

最後に小鳥遊さんは、山田の頭をぐりぐりしました。

痛いです……………。

死ぬかと思いました。

「こんな可哀相な山田を……………」

何でみんな放って置くんですかー！ー！？

こんな酷い目にあった山田を……………！

放置するんですか！？

もはや山田を見てくれるのは……………。

甘やかしてくれるのは……………！

「相馬さんだけです！」

さあ、山田は向かいます。

山田の『優しいお兄さん候補』である、相馬さん——相馬博臣に
会いに。

「や……山田さん……？　そんなにくつつかれると、おれが動きづらいんだけど……」

「大丈夫です。山田は相馬さんの邪魔はしませんから」

「だったら、邪魔になるから離れて欲しいな……」

ああ！　最高です！　相馬さんは！

爽やかなお兄さん。

優しいお兄さん。

もう、相馬さん以外に、山田のお兄さんはいません！

天涯孤独の山田のお兄さんは相馬さんだけです！

「……大体、山田さんは天涯孤独じゃないでしょ……？」

「何を言っているんですか。山田は天涯孤独のみですよ」

「ははは……」

冗談を言っているんでしょうか？　いや、確かに山田は天涯孤独

じゃないですけど。

恐るべし、相馬さん。

山田の正体を知っていますもんね。

「とにかくです、相馬さん、こんな可愛い山田を甘やかしてください
い」

「ええ……。おれなんか？　甘やかすんだったら、小鳥遊くんの方がいいんじゃない……」

「あの鬼は山田を甘やかしてはくれません。甘やかしてくれるのは、相馬さんと音尾さんだけです」

「お……鬼って……。確かにそうかもね、小鳥遊くんは……」

おお！　山田の意見に賛同してくれました！

嬉しいですよ！　さすが山田のお兄さんです！

そんな風に、相馬さんとじゃれていたら、

「あらあら。仲がいいわね。二人とも」

って声が掛かりました。

この声の主は……。

「あ、八千代さん」

「轟さん、ナイス！」

相馬さん、何がナイスなんでしょう？

時々、言っている意味が分かりません。

もしかして、山田よりおかしい人なんでしょうか。

かわいい相馬さんだけに。

「でも葵ちゃん、今シフト中でしょ？　ちゃんと働かないと、相馬

くんが、甘やかしてくれなくなるわよ？」

「はっ！？　何ですと！」

「と……轟さん……」

山田の相馬さんが甘やかしてくれなくなる！

これは人生の一大事です！

「山田！　精一杯働きます！」

「その調子その調子。頑張ってね、山田さん」

「そうね、相馬くん。でも、貴貴方も働いてね？　佐藤くんだけに

任せてたら、可哀相でしょ？」

「大丈夫だよ。佐藤くんはできる人だもん」

「そ……そう……」

相馬さんは、山田と同じように、仕事をさぼっていたんですね。

山田のお兄さんなだけあります。兄妹ですもんね。

「いつからおれは山田さんと兄妹になったのかな……？」

「決まっています！　出会った瞬間からです！」

断言できます！　山田は胸を張って、ちゃんと言えますよ！

「断言された……」

「さあ！　無駄話はそこまでよ、葵ちゃん。これからは、仕事」

「は……い……」

「今日は私も一緒にやってあげるから」

「本当ですか！？　山田、八千代さんがいて心強いです！」

思わず山田は八千代さんにハグしました。

「あらあら。しょうがないわね」

八千代さんは頬に手を当て、困った感じにしています。表情はそんなこと、全然感じられません。

「じゃあ、行きましょう！ 八千代さん」

「ええ」

と、さあ！ 今度こそ山田はやると決めた瞬間、

「八千代。パフェ」

と、店長——白藤杏子の声が、八千代さんに掛かった。

それを聞いた瞬間八千代さんは、

「はーい！ 杏子さん！ ただ今！」

と、山田の傍を離れていきました。

「や……八千代さん！ 山田と一緒にお仕事するんじゃない？！」

「ごめんね、葵ちゃん。杏子さんからパフェを頼まれたから……。」

悪いけど、一緒にはできないわ」

「え……」

「でもね、葵ちゃん。一人でやることも、葵ちゃんが大人になるためには必要なことだから。それを成し遂げたらきっと相馬くんも、思う存分甘えさせてくれるわ」

「八千代さん……」

「頑張ってね！」

「はい！ 山田、頑張ります！」

山田がそう言ったのを聞いて、安心した八千代さんは、「杏子さ〜ん！」と、店長の方へと駆けていった。

「山田……！ 頑張ります！ 見ていてくださいね、相馬さん！」

山田の働きっぷりを！

「……轟さん、上手い具合に言いくるめたな……」

「え？ 何か言いましたか？ 相馬さん」

「ううん、何も言っていないよ、頑張っただけ」

そう言って相馬さんは、山田にひらひらと手を振ってくれました。それは、山田にとって、凄く嬉しいことでした。

「はい！ それじゃあ、行ってきます！」

さあ、山田は頑張りますよ！

今日で『今までの山田』は卒業です。

これからは『新しい山田』で行きます。

山田は今日から生まれ変わります！

きっと、山田が頑張って働いたことを音尾さんが聞いたら、喜びますね。

そして、山田の『養子縁組』の願いも聞いてくれるかもしれせん。

そのためにも……！

「山田、精一杯頑張りますっ！」

生まれ変わった山田、発進です！

……ちなにみ、その後、山田はまた皿を割って、小鳥遊さんに怒られました（今度は二時間です。一体どうやったら、こんな長い時間怒れるんでしょう？）。

小鳥遊さんの所為で、山田の『やる気ゲージ』は、一気にダウンです。

気分は急降下——どころじゃない程、落ち込みました……。

山田は、音尾さんが、養子縁組の書類を持って帰ってくるのを、働かずに、待とうと思います。

以上、山田の小説でした。

三品目 山田のバイト生活（後書き）

どうでしたか？ 『三品目 山田のバイト生活』は。

少し明るめにしたつもりです。前回が暗かったので。

山田の語りは、正直面白かったです。『山田』と何回も連呼するのは、少し大変で

したが。

次回は、八千代の語りで小説を書きたいです。

私は、八千代が一番好きなので、張り切って書きます！

では。また次回も見てくださいね。

神無月愛衣でした☆

四品目 八千代のチーフの仕事（前書き）

一昨日から始めて、今日で四品目。早いなく。

……と言うことで、今回は、前回告知したように、語りは八千代です。

杏子さんLOVEな八千代にLOVEな私ですが、頑張って書きたいと思います。

それでは、スタート☆

四品目 八千代のチーフの仕事

ファミリールレストラン『ワグナリア』。

私、轟八千代は、このレストランで、ホールチーフをしているの。理由は勿論、大好きな『あの人』の傍にいたいから――。

だから私は、今日も、チーフとして、仕事を頑張る……！

「八千代ー。パフェー」

いつものように、私の心に、『あの人』の声が響く。

私はいつものように、その声に返事をする。

「はーい！ 杏子さーん！」

そして私は、キッチンへと向かう。

杏子さんに、私特製のパフェを作るために！

さて、今日は何をトッピングしようかなー！

イチゴ？ メロン？ バナナ？ リンゴ？

あー！ 迷っちゃう！

でも、杏子さん、どんなパフェが食べたいかな……。

そんな感じで、私はパフェを作っていた。

決めた！ 今日イチゴで！

うきうき（？）しながら、私はいつものように、クリームを絞って、イチゴをトッピングして……。

この時間が、とても楽しくて、嬉しくて。

目の前の光景が煌めいていた。

そんな私に、

「おい、八千代」

と、無愛想な声が掛かる。

一瞬、杏子さんのパフェを作る時間の邪魔をしないで欲しいな、とか思ったけど、振り返って、私はその言葉を言うのは止めた。だって、その人は……。

「あら、佐藤くんじゃない。どうしたの？」

「『どうしたの？』じゃねーよ。いつも言ってるだろ？ 店のものを勝手に使うなって」

「え？ どうして？ 杏子さんのためなんだから、いいじゃない」

「……それじゃあ、店のものがなくなっちまうだろ？ そんなことになったら、客がパフェを食べれねえじゃねーか」

「そ……それは……」

どうしよう……。佐藤くんに正論を言われたから、反論できないわ……。

確かにそうかもしれないけど、でも、パフェを作らなかったら、杏子さんが……。

「えっと……ね？ 佐藤くん……」

私が戸惑っていると、救いの声が聞こえた。

「――それなら心配はない」

「な……」

「き……杏子さん……」

い……いつの間にここに……？

「どういことだ？ 店長」

「材料なら、今便利な後輩に買いに行かせた」

「え……？ 杏子さん、それって……」

「陽平だ」

陽平さん？

だったら安心だわ！

「じゃあ、パフェ、作りますね！」

「ああ、頼んだ八千代」

「はーい！」

さすが杏子さん、手回しが早いわー！

さらにテンションが上がった私は、鼻歌を歌いながら、続きを作った。

「で……できた……！」

今日は、いつもより一段とよくできたわ！

早速杏子さんに届けなきゃ！

「杏子さ〜ん！ パフェできました〜！」

「おい！ 八千代！ ……たっく……」

後ろで佐藤くんが私を呼び止めた気がしたけど、今は杏子さんを優先しなきゃ！

「お待たせしました〜。杏子さん」

「おお！ 待っていたぞ！ 八千代！」

そう言って杏子さんは、スプーンを手にとって、早速食べ始めた。「美味しい！ やっぱり八千代のパフェは最高だな」

そんな風に美味しそうに私のパフェを食べてくれる杏子さんを見て、私は幸せな気分になった。

「杏子さん、パフェ食べれてよかっただろうな〜」

何て、私はぼーっとしていた。

それにさっき、陽平さんが来て、（いつものように、ドアを壊していた。杏子さんはドアが直るまで、陽平さんを店には一切入れなかった）材料を持ってきてくれたから、いつでもパフェが作れるわ。よかったわ〜！

今はお客様も少ないし、外の掃除をしようかな……。

そう思って、外へ出ようとしたら、自動ドアの所に、女の子がいた。

「あら？ あれは、伊波ちゃん？」

どうしたのかしら？ 伊波ちゃん。

外をぼーっと眺めては、溜息をしているわ。

悩み事かしら？

「……………」

ここで、普通なら、悩みを聞いてあげるのよね。
先輩として。

「よし……………！ チーフとして、ここは伊波ちゃんの相談に乗りましょう……………！」

決心した私は、伊波ちゃんの元へと向かった。

「ねえ、伊波ちゃん。どうしたの？」

「あ……………、八千代さん……………」

「悩み事だったら、私が相談に乗るわよ？」

「あ……………、ありがとうございます……………」

そう言って頬を赤らめた伊波ちゃんは、とても可愛かった。
私を頼ってくれる感じがして、嬉しい気持ちになった。

「じつは、小鳥遊くんのこと……………」
「？」

そう言えばこの二人、まえも喧嘩(?)したのよね。

あれは小鳥遊くんが悪かったんだけど。

でも、伊波ちゃんはどこかへ行っちゃったりしたから、大変だったのよね。

あのとき、見つけれよかったわ……………。

って！ 今はその話は置いておくのよ、私！

今は伊波ちゃんの悩み事を聞かなくちゃ！

「で、小鳥遊くんが、どうかしたの？」

「……………私の『世話係』のことで……………」

「……………？」

「小鳥遊くん、私の男性恐怖症を治すために、『世話係』をやってくれてるけど……………。最近、もしかしたら、見放されるんじゃないかって……………。心配で……………」

「え……………？ どうして？」

「だって、この前、『世話係』を止めておけばよかった……………、みたいなことを言っていたから……………」

「そう言えばそうだったわね……」

でもあれって、小鳥遊くんの冗談だったんでしょ？
だったら……。

でも、伊波ちゃんの台詞は、まだ続きがあった。

「それに……」

「え？」

今までとは違って、伊波ちゃんは声のトーンを落として言った。

「殴られるの……いやなんだろうな……って思うんです……」

「あ……」

「た……小鳥遊くんは……気にしてはないけど……。私、時々思うんです。殴られなかったら、幸せなんだろうな……って……」

「それは――」

「だってそうじゃないですか？ みんな……殴られたくないでしょ……？ だから……、小鳥遊くんもそうなのかなって……！」

「伊波ちゃん……」

気がついたら、伊波ちゃんは、ぽろぽろと涙を流していた。

伊波ちゃんの言ってることは正しい。

けど……、小鳥遊くんの気持ちは……。

……ここって言わなきゃ。小鳥遊くんのためにも。

伊波ちゃんのためにも。

「……それは……、違うんじゃないのかしら」

「え……」

「だって小鳥遊くんは言ってくれたんでしょ？ 伊波ちゃんに」

あの日、『最後まで面倒をみます』って。

だったら、そう言ってくれた小鳥遊くんを信じなきゃ。

「確かに伊波ちゃんの言ってることは正しいわ。けどね、小鳥遊くんの気持ちは、そうじゃないんじゃない？」

「あ……」

「小鳥遊くんは伊波ちゃんを信じてくれた。だったら伊波ちゃんは、そう言ってくれた小鳥遊くんを信じなきゃ。じゃないと……」

小鳥遊くんが救われないじゃない。

私はそう言った。伊波ちゃんに、はっきりと。

「はい……。そうですね……。八千代さんの言う通りです……。私

……小鳥遊くんのこと、信じてなかったかもしれない……」

「そう……」

「ありがとうございます、八千代さん。おかげで、心が晴れました！ 私、今日も頑張ります！」

「それならよかったわ……。お仕事、頑張ってね」

「はい！」

そう言っって伊波ちゃんは、元気よく走っていった。

「よかった……。元気になって」

心からそう思えた。

だから、杏子さんの声も、より心に響いた。

「そうだな、八千代」

「え……。？ 杏子さん、いたんですか……。？ 全然気付かなかった……です……」

「ああ、いた。伊波が元気がなさそうだったから、励まそうと思っ
てな……。でも、よかったな」

「え？」

「伊波が元気になって」

「……………！」

そう言っって杏子さんは、ぽん、と私の頭を撫でてくれた。

「きょ……。うこ……。さん……」

「八千代のおかげで、店の関係がグクシヤクならず済んだ。伊波
が元気になった」

そして、大人の声色で、杏子さんは言った。

「さすが『ワグナリア』のチーフだな」

「……………っ！」

その言葉は、どんな言葉よりも。
一番嬉しいもので。

その言葉を杏子さんに言って貰えて。

私の背景は、幸せに染まった。

「八千代、これからがんばれ」

私は嬉しさのあまり大きな声で、答えた。

「はい！ 杏子さん！」

私は気付かない間に大人になっていく。

でもその、杏子さんと共に過ごした時間は、全て幸せ色で。
思い出になって。

そして私は、今日もまた、杏子さんと一緒に、色とりどりの毎日
を。

楽しい瞬間——思い出を、作っていく。

四品目 八千代のチーフの仕事（後書き）

……随分と長い話になりましたね、『四品目 八千代のチーフの仕事』。

気合いを入れすぎました（笑）

実はこの話は、八千代のキャラソン『Colorful Days』を少し意識しているんで

す。気付いた人もいるのでは？

とにかく、楽しくなっていたら嬉しいです。

前にも言いましたが、私は今、『書いて欲しいストーリー』を募集しています。も

しあれば、メッセージを送ってください。

次回は誰を語りにするか決めてませんが、頑張ります。

それでは、また♪

五品目 ぽぷらの憂鬱 前編（前書き）

きりがいい、五話となりました（それにしても早いな）。

今回は、ぽぷらが語りです。

ちっちゃくて可愛いぽぷらを表現できるよう頑張ります。

それではどうぞ♪

五品目 ぼぶらの憂鬱 前編

「いらっしゃいませ！」

私は大きな声で、元気よく言った。

「何名様ですか？ ……はい。では、こちらへどうぞ」

お客様は、三名様（大人二人と子供一人。どうやら、家族みたいです）で、その子供はとても可愛かった。

……小鳥遊くんが接客じゃなくてよかった……。

「ご注文はおきまりですか？」

「じゃあ、サラダと……」

お父さんらしき人が、淡々と注文する料理を言った。

「……ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

「はい」

「かしこまりました。ではごゆっくりどうぞ」

私がテーブルを少し離れたとき、あの子供が「ねえ、ねえ……」と、何かを母親に尋ねていた。

「あのお姉ちゃん、どうしてあんなに背が小さいの？」

「しっ！ 声が大きいでしょ！ 聞こえたらどうするの！」

「ごめんなさい……」

見ていなくても、女の子がしゅんとしたのが分かる。

それにしても……！

私は……！ 私は……！

「あ、先輩！ おはようございます」

「おはよう！ かたなしくん！」

気付けば、目の前には、同じフロア担当のかたなしくんがいた。

「あゝ！ 先輩は今日もちっちゃくて可愛いな」

「……………」

か……かたなしくんも……！

みんな言ってるけど、私は……！

「ん？先輩、どうしました……」

「私はちっちゃくなんかないよー！ー！」

かたなくんの台詞を遮って、私はそう言った。

「もう！みんなして私のことちっちゃいとかちっちゃいとか……！
私はちっちゃくなんかないよっ！」

「た……種島さん……？どうしたの？」

「あ！伊波ちゃん！」

怒りながら食器を片づけていたら、伊波ちゃんが少し驚いた感じで声を掛けてきた。

そして鬱憤晴らしに、伊波ちゃんに、お客様の女の子のこととかたなくんのことを話した。

それを聞いた、伊波ちゃんの感想は、

「そっか。それは災難だったね……」

だった。

「でしょ？みんな私のことちっちゃいっちゃいって……。こっちの身にもなってみてって話だよ」

「確かに言えてるね……」

伊波ちゃんは、私の意見に賛成してくれた。

「私だってちっちゃいこと悩んでるのに……。これ以上傷を広げないで欲しいよ……」

と、俯きながら言うと、

「……全くです」

と、いきなり伊波ちゃんじゃない声が聞こえた。

「うわっ！」

「みなさんは種島さんのことをちっちゃいとか可愛いとか言ってますけど、山田だってちっちゃいんですよ！」

「何だ……葵ちゃんか……。驚かさないでよ……」

「そうだよ、山田さん。私もびっくりしたよー」

私と伊波ちゃんは、軽く葵ちゃんを叱っておいた。

「すみません。山田はこういう登場しかできないんです。神出鬼没なんです」

「それはそれで困るけど、『登場』とか言わないで欲しいな……」
少し引いている伊波ちゃん。

うん、さすがの私でも今の葵ちゃんには引いたよ。

「で、どうしたの？ 葵ちゃん」

「はい。実は山田だってちゃっちゃいんです。種島さんの次に」

「そう言えばそうだったね」

「でも、みんな種島さんを『可愛い』、『ちゃっちゃい』とか言ってる……。山田のことなんて、これぼっちも見てください」

「葵ちゃん……」

でも、確かに私の次に小さい葵ちゃんは、可愛いのに、私みたい
に、『ちゃっちゃい』とか言われてない……。

「何でだろうね？ 葵ちゃんもちっちゃくて可愛いのに」

「でしょ！？ 山田だって可愛いんです！」

勢いよく言う葵ちゃん。

……本当にびっくりだよ。

「……それって……山田さんが、『小生意気』だからじゃない？」

と、今まで沈黙を貫いていた伊波ちゃんが、故口を開いて言った。

「こ……小生意気ですと……！？」

伊波ちゃんの発言に、ショックを受けている葵ちゃん。

「うん……。種島さんと違って、山田さんが『ちゃっちゃい』とか言
われないのは、山田さんが小生意気だからだと思うの」

「つまり、山田が生意気じゃなくなったら、可愛がって貰えるん
ですね！？」

「うん……多分だけど……」

ん？ 生意気だと、ちっちゃいとか言われない……？

「つてことはさ！ 伊波ちゃん！ 葵ちゃん！」

「？」

「？」

「私も、小生意気になったら、もう『ちっちゃい』とか言われないうつてことだよね！？」

「あ、確かにです。種島さんの言う通りです」

「そうだね、種島さん」

「やっぱりそうだよ！ 私も葵ちゃんみたいに、小生意気になったら、『妹オーラ』が消えて、ちっちゃいことが、意味を』為さなくなるんだよ！」

「よしっ！ 葵ちゃん！」

「は……はい！」

いきなり話を振られてびっくりしたみたいだけど、

「私達で『可愛い・小生意気って言われ隊』、結成しよ！」

これを聞いた瞬間、明るくなって、

「はい！ 山田、種島さんと結成です！」

と言った。

「わ……私は……隊員にはならないけど、アシスタントと言うか……。そんな感じでいいかな……？」

伊波ちゃんも、協力してくれるみたい。

だったら、協力を頼まなきゃ。

頼れる人はどんどん頼ろう。

「いいよ！ 伊波ちゃん！ 伊波ちゃんもやろうよ！」

「うん！」

「よしっ！」

私、伊波ちゃん、葵ちゃんは、声を揃えて、宣言した。

「『可愛い・小生意気って言われ隊』！ けっせーい！」

もうこれで、『ちっちゃい』とか言わせないぞー！

五品目 ぽぷらの憂鬱 前編（後書き）

話を考えていたら、一話じゃ収まらないことに気付いて、慌てて前後編組にしました

た。なので、きっと次回で、この『五品目 ぽぷらの憂鬱』は完結します。

ぽぷらしさを頑張って出していきたいです。

短いですが、次回もお楽しみに！

感想、お待ちしております☆

六品目 ぽぷらの憂鬱 後編（前書き）

少々早いですが、後編の更新をします。

ぽぷらで前後編って、凄いですね。

史上初の、同一人物による連続語りです。

それでは、前回の続きをどうぞ♪

六品目 ぼぶらの憂鬱 後編

「……結成したのはいいですが、具体的に何をするんですか？」

葵ちゃんの質問に、思わず詰まってしまった。

「そうだね……。うーん……」

「まず、種島さんと山田さんだと、目的……、目指すことが違うから……。同時進行で考えないと……。いけないんじゃない？」

「そうだね……」

伊波ちゃんの言う通りだよ。

「私は『小生意気』って、葵ちゃんは『ちっちゃくて可愛い』って言われたんだよね」

「はい。そうです。山田はそう言われたんです」

「うーん……。どうしよう……」

ちよっと困ったぞ？ 私達が目指す場所は、あるいみ正反対だもんな。

「あ……。だったらさ……」

と、恐る恐るといった感じで、伊波ちゃんがある提案をした。

「種島さんは、山田さんに『小生意気』を。山田さんは種島さんに『ちっちゃくて可愛い』って言われる理由を、聞けばいいんじゃないかな？」

「……どういうこと？」

「……どういことですか？」

二人できょんと首を傾げて言った。

「えっとね……。だから……。お互いがお互いから……。その……。学ぶ？ なんだよ……。自分が知りたいことは、もう一人の相手が知ってるから……」

「……………」

そっか！ その手があったか！

「ナイス！ 伊波ちゃん！」

「ナイスです！ 伊波さん！」

私と葵ちゃんは、同時に言って、同時に伊波ちゃんに飛びついた。
「わっ！」

「さすがだよ！ その手があったことに気付くなんて！」

「伊波さんのおかげで、私達は、目的を達成できそうです！」

「ううん。いいよ、全然。でも、お役に立てて、嬉しい」

こうして私達は、お互いの目的を達成すべく、隊を発足した。

「あ、先輩！」

早速かたなしくんを発見だ！

あれから私は、葵ちゃんから『小生意気』について教わり、葵ちゃんに『ちっちゃくて可愛い』について教えた。

これで、きっと私は『ちっちゃくて可愛い』って（特にちっちゃい方）を言われずに済むぞ！

「あゝ！ やっぱ先輩は可愛いから癒され……」

かたなしくんが私を撫でようとしたのを、見計らって……！

えい！ って、かたなしくんから離れた。

そして、こう言い放つ。

「私のこと、気軽に撫でないでくれる？ かたなしくん」

「え？ 先輩？」

葵ちゃんには、『小生意気』と、ついでに、『冷血で毒舌』というものを教わった。

だから、今から、かたなしくんを相手に実践だ！

「私、今までかたなしくんから、『ちっちゃくて可愛い』って言われるの我慢してたの。でも、限界だよ」

「先輩……」

「今度から、この種島ぱぶらに気安く触らないでくれる？」
「……………」

そう言うと、かたなしくんは、俯いた。

……ちょっと言い過ぎたかな？ でも、普段私に散々『ちっちゃい』って言ったお返しだよ！

これで反省しなさい！ って思った。

でも、かたなしくんは、落ち込んだり、泣いたり（ここで泣いたら、男としてどうだろ……）した訳じゃなかった。

むしろ……。

「お……」

「『お……』って何？ かたなしくん？」

かたなしくんは、拳を上に出して、大きな声で言った。

「大人ぶってる——クールぶってる先輩も可愛い——」

……………。

「え—————!？」

今までのこと、意味ないじゃんか！ かたなしくん！

「……もう、私落ち込んだよ……」

溜息をついて、涙目になりながら私は言った。

「本当です……。山田も佐藤さんに、種島さんから教わったことを実践したら、『うぜえ』って言われて、頭ぐりぐりされましたー」

まだ痛いのか、葵ちゃんはこめかみを押さえながら言った。

「山田は、どうやってもみなさんから『可愛い』なんて言われないんです……」

「私も、どうやってもかたなしくんやみんなから『小生意気』なんて言われないんだよ……」

「げ……元氣を出して！ 二人とも……」

こんな暗い私達を、伊波ちゃんは必死で励ましてくれた。

「二人とも、試した相手が悪かったんだよ……。小鳥遊くんは、どう見ても、種島さんのことを可愛いって言うし、佐藤さんは、どう

やっても山田さんのこと小生意気って言うから……」

「……………」

「……………」

「だ……だから、他の人に試せばいいんだよ！ 相馬さんとか、八千代さんとか……………」

「……そっか…………！ そうだよね！」

「……そうです！ 山田は諦めません！」

私と葵ちゃんは、手を合わせて、宣言する。

「まだまだ諦めないよ！ 『可愛い・小生意気って言われ隊』は、永遠に不滅だよっ！」

「はい！ 山田、最後まで必ず種島さんと一緒にやり遂げます！」

「二人とも……、元気になってよかった…………！」

そうだよ、まだ諦めるのは早い！

まだこの作戦が、失敗に終わった訳じゃないもんね！
よし！

種島ぽふら、まだまだ頑張るぞー！

「『可愛い・小生意気って言われ隊』！ 再び発足だー！」

きつといつか、『ちっちゃい』って言われなくなるぞ！

いや、言わせなくしてやる！

見てろ！ かたなしくん！

六品目 ぽぷらの憂鬱 後編（後書き）

無事完結です。

ぽぷらは、楽しく語りをさせて頂きました。

これから、頑張って欲しいですね^^

さあ、ここからは予告です！ 読んでくださいね！

次回からは、長編になります。

アニメでは、伊波ちゃんと小鳥遊くんの関係が主なので、この長編では、もう一組

の、八千代と佐藤の関係を主にして執筆していきます。

つまり、アニメとは正反対です。

なので、この長編を、お楽しみに！

そして、是非読んでください！

では、また次回、お会いしましょう♪

七品目 佐藤の日常（前書き）

長編の一話目です！

これは、アニメでもよくある光景を書いたただけですが。

でも、ここから長編は始まります。

では、スタート！

七品目 佐藤の日常

今から四年前。

おれは、一人の少女に出会った。

そいつはかなり変わっていて、常に帯刀していたり（後から知ったのだが、家が刃物店らしい）、店の店長が大好きで。

変人だけど、可愛くて。

おれは彼女に惚れた。

そしてそれから四年後。

今でも、おれはあいつ——轟八千代が好きである。

「全くさー。いい加減、佐藤くんも、轟さんに告白すればいいのに」

と、微笑みながら、相馬は言った。

「うるせえ」

「そうやって、引き延ばしたり、押しが弱いから店長に取られ……
って！ 佐藤くん！ 待つて！ それは痛いから！」

おれは、我慢が限界になったので、その辺にあったフライパンを
適当に選んで、相馬に殴りかかる。

「もー。佐藤くんったらー。怖い怖い」

「相馬、お前、それ心から言ってるのか？ 棒読みに聞こえるんだ
が」

「え？ 何言ってるの？ 佐藤くんは十分怖いじゃん？ おれが棒
読みするわけないだろう？」

にこにこして相馬は言う。

「……むかつく……」

……相馬の『笑顔』って、何かむかつくんだよな。
裏がありそうって言うか。

まあ、実際ありそうだな。

「……相馬、お前は生きてるだけで邪魔だよ」

「え？ さ……佐藤くん？ 何？ おれ、何かした？」

「ああ……。お前は生きてたら駄目なんだ」

「……酷い言われよう……」

相馬は嘘泣きのまねをしながらそう言った。

すると相馬は、「あ」と言って、ある方向を指さした。

「轟さんだ」

振り返ってみてみると、そこには確かに八千代がいた。

八千代はいつものように、店長のためにパフェを作っていた。

また勝手に店のものを使いやがって……。

まったく、しょうがねえな……。

「おい、八千代」

「？」

振り返った八千代は、おれに、

「何？ どうしたの？ 佐藤くん」

と、言った。

……その手には、生クリームが握られていた。

どんだけ作るんだよ。

「いつも言ってるだろ。店のものを勝手に使うなって」

「だからいつも言ってるじゃない。作らないと杏子さんが……」

「……店のものがなくなったら、どうするんだ？ 今は客も少ねー

からいいけどよ……。注文が入って、材料がなかったら、客が困る

んだぞ」

「……うっ……」

八千代が、冷や汗を流したのを、おれは見逃さなかった。

このまま、分かってくれればいいんだが……。

そう思った瞬間、忌々しい声が掛かった。

「八千代ー。パフェ、まだかー？」

それに、八千代は。ぴくり、と反応する。

「はーい！ 杏子さーん！ 今から持ってきてまーす！」

「おい！ 八千代……」

「ごめんね佐藤くん。杏子さんが呼んでるから」

そう言っ、ピッチを上げてパフェを完成させた八千代は、スキップしながら店長の元へと行った。

「ハア……」

「あははー。また轟さんに、捨てられちゃったねー」
にこにこ微笑みながら、後ろから相馬が言った。

「でも、轟さんも健気だねー。いつも店長のために……って！ ストップ！ 佐藤くん！ それはギブ！

おれが死ぬから！」

……相馬で鬱憤晴らしでもするか……。でも、さっきの、店長に反応した八千代……。

「……………っ！ さ……佐藤くん！？」

言葉にできないおれは、相馬で気を晴らした。

ここまでは、おれの日常。

このときのおれは、この日常が崩れるとは思っていなかった。

八千代と、『あんなこと』になるって、想像することすらできなかった……。

七品目 佐藤の日常（後書き）

長編の一話目を無事執筆できてよかったです。今からこの長編を続けていくのは、

少し大変だと思いますが、頑張っていきたいと思っています。

次回の語り部は、再び八千代でやっていきます。

オリジナルなので、原作とは違うし、自分にもどうなるか分かりませんが、どうか

見守ってください。

では、この辺で。

今日は、あと二話ぐらい更新したいです♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7932y/>

WORKING!! -個性的なファミレス-

2011年11月26日17時52分発行